

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別換取認許第三五二號
昭和二十九年十一月一日發行

第二十卷 十一月號

淨

土



建文

十一月號

増上寺
入佛式



増上寺では新本堂に適しい御本尊佛を迎えん
ものと、文字通り東奔西走していた所、此程、
京都西光寺の願上人作なる瑞相尊き御本尊
像が贈られた。十月十三日、信徒松坂屋デバ
ートで一般開帳の上、十五日、大門にて一山
都内寺院稚児にて數丁に及ぶ行列を整え、木
遣を先頭に入山、開眼法要を行つた。(寫眞上
は権尾法主、以下の行列後方の白布を流うのが御本尊、下
は先頭、三門前にかゝる所。)

浄土 十一月號 目次

卷頭言.....(1)	眞理への道.....眞野正順(5)
秋の小鳥.....吉田絃二郎(2)	いのちの尊重.....竹中信常(10)
講話 生と死.....藤井實應(14)	幸福への第一歩.....藤井正亮(18)
	藤井先生の教悔に寄せて...千葉 勇
加茂の上人.....鶴田湛泉(21)	童話 どじょうとたにし...蓬田八重子(28)

言

頭

卷

増上寺にお迎えした御本尊が入佛に先立つて銀座松坂屋に飾られ、一般の参拜に供せられた。一方、鎌倉美術展は繪畫が多かつたが、とに角當時の美術の主流が佛教藝術であつたことを如實に示している。近來、都會のデパートでは美術展、特に古美術の集約的な陳列が盛んである。出不精でもあり、多忙でもある者にとつては、居ながらに天平・飛鳥の世界を偲び室町・鎌倉の息吹きにひたることが出来る幸せがある。此等の展覽會を暇のある限り見て廻つていつも残る印象は、日本の美術が佛教藝術によつてつらぬかれていくことである。現代美術でも時に、例えば川端龍子畫伯などには何か佛教的氣靜が感じられるし、二科の里見勝藏氏も例の筆致で不動明王を描いている。このような事柄の一つ一つはさのみ注目もされぬであろうが、矢張り根底的に抜き難い要素を佛教が持つていくことの一つの現われと云うことが出来る。映畫宮本武藏が大谷九郎衛門の演ずる澤庵は少々アキが強いようだが、見る人々には劍氣の裏に秘む禪氣を感じさせるに充分である。

佛教は生きている。むしろ職業的佛教者の氣づかない所に、ちがつた形で立派に生きている。卑俗には町の隅に、農村のはてにもそれは培われている。たゞ、所謂佛教として、いわば公式的に法衣をまとひ、莊嚴に飾られた佛教としてではない丈に、人々の目には佛教として印象づけられないのにすぎぬ。そのように、民衆の生活の隅々にまで浸透し、その心の在り方を傾向づけていることは現代に佛教が生きる一つの型ではあるが、残念なことには、それが餘りにも身近かに、生活感情と一つになつてしまつた結果、自らの持つ佛教性に大衆が心づかぬということである。自分の姿を自分から抜け出てふりかえつて見る必要がある。そうすれば人々は必らず、自分達の思想、生活、行動がいかに佛教と深く繋り、佛教的なものにとりかこまれて生活しているかに氣付くであろう。

佛教者はまずこのことからその仕事の第一歩を開始すべきである。徒らなる回顧趣味といふなかれ。己れの立つ地盤を注視せしめることの故にこれは是非せねばならぬことである。それには直感的に且つ具象的にその本體を捉えるに便利な美術が有用である。龜井勝一郎氏も云うように、眞實の佛教美術は「觀察よりもまず合掌したい氣持になる」ものである。美術の秋にこそこれを通じてまづ己れの佛教性を銘記することである。

秋の小鳥

吉田 絃二郎



武蔵野にも青鷗アヲシが鳴き、ひたきの聲を聴くようになった。

おなじ秋の鳥でも百舌は瘖高い聲で鳴き、ひたきは秋の空に溶けこむよう
なやはらかな聲でさえすり、青鷗はたゞひとり葉がくれにさゝやくような聲でうたっている。

それぞれにちがつた鳴き方ではあるが、秋の鳥は「死に支度致せ」と鳴くように聞かれる。

このごろ近くの農村をあるいて見ると山茶花が咲き、亂菊がかおり、百日草や鶏頭がさかりである。

ふと、花畑のかたわらに立ちどまつて、百日草や菊や鶏頭に見入る。それらの花は子供の折から毎朝佛前に供えたものなので、何となくなつかしい。

わたくしたちの田舎では春の彼岸に草花の種子を播く時は、秋の佛さまに供えるための花を選ぶのである。

都會の人たちの花壇は都會の人間の幸福のために、造られている。

佛のために播かれる花畑。人間のために造られる花壇。そして花畑のなかに育てられてゆく子供たちと、花壇のなかに育てられてゆく子供たちの将来は何うであらう。ふと、農村の小徑を歩きながらこんなことを思う。

遠い昔となつたが、わたくしの胸には色白な品のいい五十二、三歳の老婦人が泛かんでくる。五十幾年前のことである。

かの女は城下の侍屋敷に生れたというだけに、行儀作法も正しく、しとやかな婦人であつた。

かの女は結婚して一人の男の子をもうけたが、間もなく夫に死に別れ、男の子を伴れて農家の隠居に再婚した。

その農家の隠居の離房はなれにあずけられて、わたくしは毎日往復四里ばかりの道を城下の學校まで通つたのであつた。

冬になると、老婦は眞つ暗なうちに起きて、わたくし

のために飯を炊いてくれた。寒い日がつゞいた。毎朝家を出てから半里くらい歩いたところでほのぼのと夜が明けた。

そのころかの女の一人子は長崎あたりの造船工場にはたらきに出かけていた。が、たよりもとだえかちであつた。

かの女はかつて一度も怒つたこともなかつた。いやな顔一つ見せたこともなかつた。かの女は柔和そのものであつた。いつも靜かで、さびしい眼は菩薩を連想させた。

ある雪の深い日であつた。日暮れころ學校からわたくしがかえつてゆくと、かの女が家のまわりの流れのなかに股までもはいつてさがしものをしているのであつた。

「何をしているのですか？」

とたずねるとかの女は、

「あなたさんの象牙の箸をこゝに落しましたので、さがしております。」

と、いつものやさしい眼に涙を泛かべて雪に降られながら、流れの外に出ようとはしなかつた。

かの女のまごころは年少のわたくしの魂に、終生消えがたい人間の心の美しさを刻みつけてくれた。

五十幾年の歳月が流れた。わたくしは故郷の友人に托してかの女の情報について、墓地についてたずねてやつたが、かの女は隠居ともわかれて、たゞ一人の息子を頼りに唐津あたりの炭坑に出かけて行つたらしいということであつた。

かの女はどこかで永遠に眠つてゐるであらう。あるいは雑草のごとく眠つてゐるかも知れない。しかしかの女のやさしかつた眼は、さびしかつた眼は、菩薩の慈悲の眼のごとくわたくしの魂にまたたいてゐる。かの女はどこかで美しい花となつて、薫つてゐるであらう。

今日も庭の木立に青鴉あまじが鳴き、ひたきが鳴いてゐる。鳴いては静かな間まを置いてゐる。「間」のあいだかれらも静観してゐるのであらう。

秋は人間にとつても人生について、永劫について、観照すべき「間」の季節である。

芝居に一番大切なものは「間」を置くということである。わたくしたちの生活にも静かに思惟する「間」を持たなければならぬ。

× × ×

行 誠 上 人 二 吟

月花をいのちとなせば世のなかに

おもひわづらふ春秋もなし

さらさらと音はたてゝもあし原の

末葉の風はとまらざりけり



眞理への道

眞野正順

何時いつでありましたか、ラジオで、徳川夢聲が面白く放送

した西遊記の物語。あの孫悟空や沙悟淨を連れて白い馬に

のつた三藏法師といふのは、玄奘といふ實在の人物であり

まして、この人が唐の時代、遠く經典を求めて印度に行つ

た旅行記をあとから脚色したものであります。實際の玄奘

には、弟子もなくなつたゞ一人、秘かに國を出て非常な苦心を

して永い旅行をするのですが、それが大唐西域記といふ本

になつて残つております。夫によりますと、玄奘が漸く印

度に入り、只今のガンガを船で東へと下つて行つた時でし

た。突然盜賊の群に襲はれ、一同に持ち物を悉く奪はれた

のですが、この時、賊の主魁かしらはふと玄奘の美しい容貌に氣

がつき、これを彼等が信仰するカーリの神の生犧いけにえにしよう

と云ふ氣になりました。カーリの女神は、祈ることを必ず

きく靈驗あらたかな神ですが、それだけ殘酷な神で絶えず人間の生血いきちを要求すると信ぜられていたのです。玄奘は逆に岸に作られた泥の壇の上に引据えられ、あはや其首ははねられようとした。この時、彼は暫らく猶豫を求めて、靜かに目を瞑つて佛を念じ「かねて我が一生の願とした佛の國を目の前にしながら、こゝに生命を終るのは残念であるが止むを得ぬ運命であります。

然し後の世は必ずこの正しい眞理と共にあつて悟をひらき、再び此世界に還り來つて、この賊達を正しき道に導き更に一切の人々を救はせさ玉へ」と一心に念じました。賊は怪しんで傍らに佇たふさんで、彼が遠く支那から經典を求めに來た清僧であるのを知つて、驚いて繩を解いて其許いほしを乞ふたので、玄奘は進んで彼等の間違つた迷信の誤あやまれることを

力を込めて説いたので彼等は心から悔悟しその悪い職業をも捨てたと傳へています。

この物語の中には、二つの宗教が現れています。賊の信ずる宗教と、玄奘の宗教と、この二つに就て今日はお話して見たいと思ひます。

よく、宗教は理性に背くものだ、と考へている人があります。我々の理性、常識では出来難い事がたを求める、こゝに宗教の意味がある。だから理性では行詰つてどうにもならなくなつた時、人は宗教に行く。病氣の不治が宣告せられた時、災厄が重なつてどうにもならなくなつた時、それ迄頼つて來た理性ではどうにも切り脱けられなくなつた時、人は宗教に行く。理屈ならぬ理屈の世界に救ひを求める。それが宗教だと考へる。だから宗教はもともと理性に背く。背くところに却て魅力がある。てのひら掌から光が出たとか、お腹の中で神様が結婚したとか、健全な常識から云へば荒唐夢稽な事であるが、そう云ふ理屈外れの處ところに、却つて特別な力があると思ふ。玄奘を襲つた賊の宗教もそうです。人間の生血を喜ぶような神であるから、却つて型破りの例外の力を出して呉れる、と思ふ。

これほど極端でなくとも、世間には、案外こう云つた考

で宗教を見ている人が多いのです。それで、宗教と云へば、すぐに何か常識外れの奇蹟——御利益を思ふ。また排斥する人も斯うしたものとして非難する。

ところが、こゝにも一つ別な宗教があります。それは倦く迄理性に背かない。むしろ健全なる人間の精神に強い自信をもち、却てそれを基礎づけて行かうとする。そう云つた宗教の傳統がわが東洋の中に流れてその特色をなしております。それを少しお話して見ましょう。

考へて見ますと、我々の智慧には二種類あるようです。一つは、物を考へるに、この現はれているものゝ互ひの連絡を考へてゆくものです。これはどうして出来たのだらう。その原因を、やはり現はれた他の現象の中に求めてゆく。結果はどうなるだらう。やはり其結果を現はれたものゝ中に探してゆく。たえず物の説明を現象の中に求めてゆく。これが私共の平常使つてゐる常識のシクミでありまして、科學はこれを極めて精密にしたものです。そして科學は、御承知の様に、現代非常な成功を示し、おどろくべき成績を擧げております。

ところが、宇宙人生の事物は、これもまた御承知の様に非常に廣いものでありまして全く果てしがたい、どこ迄も

遠くこの關係につながっている。でありますから此の中で科學で確められ範圍は、ほんの小部分に止まり、大部分はいつも空白に残る。丁度、廣い沙漠の中を原因結果の二本足でポツリポツリ歩いて行く業なものです。あちこち大きな空白が残る。仕方がないから、その部分は眼をつぶつて飛越して行く、それが私共の常識の實際であります。

ところが、學者の方は、そうはしてられないので、色々な見通しを立てて見る。實際には分つた譯ではないが、全體をつきくるめた何か説明を便りに立てて。いはゆる理説といふものです。ところが是れがまた安定していない。人の經驗の進むにつれ、目まぐるしく變つて行く。我々の知識の歴史といふものは、こう云つて理説の交代と云へましよう。そう云ふものゝ上に乗つてゐる私共は何時も落付かない。絶えず新しいものに驅り立てられながら同じ處を堂々めぐりしている。

ところが、平常はそれでいゝとして、何か大きな事につかつた時、たとへば、死とか災難とか、この自分の存在を根底から揺ぶられる様な事態に直面した時には、この知識では間に合はなくなつてくる。あちこち穴だらけツギハギだらけで、然もしよつちう動揺している知識では、全體

を問題とする眞剣な人生問題を解く事は出来ない。

そこで一つの方法が考へられて來ます。このあちこちの空白を埋める爲に、今の科學常識ならぬものを持つてくる。それには科學以前にあつた人間未開時代の原始的な考へ方を持つて來る。たとへば、身體から御光が出て來たとか、神がのり移つた、とか云ふのが夫れです。それで科學・常識では出來難い事を乗り切ろうとする。割り入れる事を割つけて行かうとする。こゝに、一種の宗教が出來上つてくるのです。近頃の新しい宗教のいふのは大抵これです。

つまりこれは、我々の常識の裂目を未開時代の思想で象嵌したものです。ですから或る場合には、兩方矛盾しながら平氣で同居している事があります。よく、あれほど理性が發達し科學も知つてゐる人が、なぜあゝ云ふインチキな宗教に引かゝつたのか、と怪しむ様な事がありますが、然し、人はその外面的知識がいくら發達しても、イザとなると迷信に陥る可能性はあるのでありまして、夫れと云ふのも、科學に埋められぬ大きなブランク空白が出來てゐるからです。

然し、何としても、其人の精神に古いバカゲた考が同居しているのは悲惨な事です。それは必ず其人の理性を曇ら

せずには置きません。かような分裂を心の中に持つ者は、必ず、いつか大きな間違いを仕出でかすものです。

この事は、大戦以前我國を風靡したあの「神がゝり」の思想傾向と思ひ出して見られ、ば、すぐ御分りの事と思ひます。かゝる事は、個人にとつても、また社會に取つても深く警戒しなければなりません。

これに對して、も一つの考へ方があります。それは先きの表面を行く知識と反對に、眞直ぐ垂直に、中心に入つてをり全體を捕へ様とする。これは特に東洋に發達した物の考へ方です。

この方向は、現象の表面をこまかく極めて行くのと違つて、一氣に全體の本質に迫つて行かうと云ふのですから、其綿密さの點においては、科學に劣るかも知れませんが、その深い全體性といふ點において遙かに勝れ、眞の揺がざる確個の坐を具へる處にその特色をもつて居ります。この眞理の表面的なものでなく、もつと深く大きいもの、この生きて動いてゐる全體、外の世界ばかりでなく、自己の本質まで併せて把もうとするものでありますから、外から眺めた知識でなく、内のそれと共に生きてゆく知性。こう云つたものに分明とした眼を見開いて眞直ぐに躍入り、そこ

にこの人生に生きる眞實の基礎を得て行かうとする。これが若いお釋迦さんが城を捨て、探ねて行つた道でありまして、佛教では、これを阿耨多羅三藐三菩提、最後の眞理の道と名づけてをります。

この眞理の道を前の科學と較べて見ますと、其方向と性質とに於て異つておりますが、二つは互ひに矛盾するものではありません。なぜならば物事を廣く探つて行く科學とその中心に向を深く追つて行く佛教とは、その方向を異にしておりまして、他を傷けるものではなく、却つて相補ふものだからです。

科學は、先に云つた様に、それだけでは、どうも部分的正確さに働き、全體としてはいつも安定しない性質をもつています。これに對し、宗教の方は、全體を目指し、深いものですが、やゝもすれば瞑想的直視的に傾き、それだけでは現實的知識と結付いて來ない。うっかりすると逸脱して古い神話などに結びついたりする。これを現實の上に具體化するためには、正確なる科學的知識と結合せねばなりません。兩者は方向を異にしつゝ、他に補ふもの、互ひに相手を越へる事によつて結びつくものと云へましよう。

佛教は、一方から見ると、科學と非常によく似ています。

物事に對するに、先づ己れを空うして在りの儘なら眞實について行く。また緣起と云つて、總^{おも}ゆる事物は互に限り無い關係に於て結ばれている事を分明^{はつき}と認める。かう云ふ點は全く科學その儘でありまして、佛教の科學と結びつき易い性格を示してをりますが、然しこう云ふ冷靜な態度で、宇宙の生ける全體に向つて行くといふ點に違^{ちが}ひがあります。生ける全體に向ふ、其中に生きる事によつて之を知る。この點から、知識はもはや單なる知識ではない。もつと身についたもの、もつと感情や意志を含んだ自分の全體、——自分の全體を似て宇宙の根底の心を知つてゆく。それと共に生きる事によつて是を知る。全體的眞理といふものは何時もこう云ふものです。

ですから、知識と云つても、宇宙から夫^{それ}だけ切り取つて來て自分達の役に立てようとする知識ではない。そうでなくて、その宇宙の根底の中に入つて行き、そこに生きるものと自己の中心に生きるものとが、同じものである事に氣がつく。そして夫れと一緒にになり、それと脈搏を合せてゆく。この様に宇宙の心を知るにつけ、益々それが限り無く深く尊く廣大無邊なものであるを知らさるゝのです。こゝに現はれた一切の現象を超え、更に更に高く限り知られぬ

ものなるを知るのです。これはむしろ一切の現象を其内からたえず呻き出しあゝ永遠の大活動であり、一切と一切たらしむる眞實の基盤である事を知るのです。

でありますから、この眞理の道は、その中に入つてそれと一緒になるもの、その大いなる働きにこの小さな我を捧げてゆくもの、つまり、この大いなる眞實に身を捧げ歸依する事に依つて、眞に揺^ゆがざる永遠の安立を得、眞實の生活^{ひま}をこゝに拓^{ひら}いて行くものです。なぜならば一切の眞實なる道德も社會もかゝる内より溢れ出て來るものだからです。

玄奘三藏が、さまざまの苦心の末、漸く目的を前にして計らず、賊のために生命を奪はれようとした時、先づ願つた事は、何か不思議なる靈力を求めたので、この災厄をのがれ様とするのではなく、すでに我が全身全靈を捧げて悔いないこの永遠の眞理と、この死によつて再び相離れる事がない事でした。この眞理によつて一切はまこと^{まこと}に存する。希ふところは來世において進んでこの眞理を遂げ、再びこの世界に歸り來つてこの眞理によつて、盜賊の誤れる所行を正し、更に一切の人類をして、良き眞實の生活に歸り行かしめる事でありました。即ち彼は、この大いなる道と一つとなり、その壯嚴な眞理展開の業に參する事によつてこの小さな我的存在の意味を見出しそれによつて一切の危難の中に、微動だにせぬ永遠の安定を得た譯であります。

し 尊 ち の い

常 信 中 竹

わたしの寺の、いとささやかな幼稚園でも、御多聞に洩れず、先日、遠足に行つた。歸つて来て夕刊を開いたら、相模湖の出来事が全紙を覆うていた。終日神經的に疲れて夕餉の膳に向つていた私は、この記事を見てゾツとした。何ということだろうと。これが二十世紀の文明を誇る現實の社會の出来事なのだろうか。いい知れない憤りを感じた。

◎

眞野先生は、先日のNHKの宗教放送「眞理への道」(本誌所載)の中で、人間の知識に二通りあり、その一つは科學的知識であるが、それは丁度沙漠の中を歩む人の足跡のように、大宇宙の空間に印せられた、點々たる、不完全なる、バラバラのものに止まる。無限に廣がる無知の沙漠の中の、このような點々は、人間の知性のいかに貧しいかを如實に物語っている。これに對して、もう一

つの「知」とは、佛教の教える、眞實にして完全、而も一點の内に全體を含むところの偉大なる知恵であり、人間の思想の歴史は先の不完全な點々によつて残こされた空間を、後の完全にして全體的な眞實の知によつて満たされて行かねばならない。——大意はこのようなものであつたと記憶する。

◎

洞爺丸事件にしても、相模湖遭難にしても、すべて、「人災」である。不完全な知識、部分的な獨斷が生んだ、悔いともかえらない悲劇である。いのちは尊い。いくら大切にしても、大切にできない程に尊い筈である。

◎

これも先頃、彼岸の中日——丁度久保山愛吉さんが亡つた日——の夜、現代人の死生觀というラヂオの座談會で論じられていたことだが、「現代の人は『死』ということ余り身近に感じすぎてゐるために、反つて『死』ということを眞自面に考えようとしななのだ」といわれた。全くその通りで、早朝元氣よく、手を振つて出て行つた吾子が、夕方は悲しい無言の姿となつて戻つて来る。決して他人事ではない。いつ我が身の上にも起るか知れぬ事なのである。昔は、「男は家のしきいを跨いで出れば七人のかたきが待つ」と云われたが、現代では、一步、家を出れば無數の殺人鬼に取り圍まれてしまう。いや、家の中にいてさえ、いつなんどき、頭の上から何か落ちて來ないとも限らない。文字通り私共はそ

の周圍を死の手によつてしつかりと取り圍まれてゐるのである。

人間に限らず、凡ゆる生き物は、刺戟が續くとこれに馴れてしまつて、平氣になる習性がある。現代人も、余り身近に「死」が澤山に存在するので、しまいには平氣になつて、いのちというものを、さのみ大切なものとも思わなくなつてしまふ。おそろしいことである。

それも自分のいのち丈け粗末にするのなら、余り迷惑にもならぬだろうが、自分のいのちを輕くみる癖がこうじると、他人のいのちも亦極めて簡単に考へてしまふ。三面記事に殺人、傷害、情死の絶えぬ理由である。これでは全く、世の中は目茶苦茶である。

石田三成は刑死の寸前、柿をすゝめられたところ、「柿は腹によくないから」と斷つたそうである。ゾルゲ事件に連座して刑死した、尾崎秀實は、當時の物資乏しい中でも、健康のためにと、苦心して藥を入手して常服していたとのことである。いのちというもの、本當の價值は、死というものを本當に見究めなければ分らないものらしい。今の人々はいのちを極めて輕く見てゐるのは、死ぬということに、生じつか馴れすぎてしまつてゐるからかと思われる。



およそ宗教と名のつくもので、「死」について何も語らないものはない。多かれ少なかれ、人間の「死」ということを説いてゐる。

それは、死を語るることによつて、生の本當の意味と價值を教えよ

うとするに外ならない。ところが近來、盛んを極めてゐる新興宗教の中でも、特に卑俗なものは生きること、いのちをのぼすことのみを説いて、死を説かない。これでは本當の生を教へてゐることにはならぬ。一日生きのびたからといつて、病氣がよくなつたからといつて、人間はそれ丈けで幸福であるとはいえない。いや、逆に、重い病床の中からこそ眞實に、いのちの尊さが感じられて來ることは、私共が折々見聞きするところである。病氣の有無などは、本當に生きるためには問題ではないのだが、それが惡用されるのも、ただ生きることにはしがみつゝ、それが駄目なら死んじまうという、非常に皮相に割切つた現代人の心の弱みからである。——最後まで、凡ゆる方法を以つて、生きぬいて行こうとする氣魄がない。生も死も粗末に扱うのが現代人の通弊なのである。



先日或る佛教の講習會に出席して、その討論會を聞いてみた。口を揃えて一致することは、今日の寺院の不活潑、僧侶の不信仰ということであつた。一老僧は憤然と叫んだ。

「自信教人信だ。それ丈けだ。ほかのことはいゝわんでも分つてゐる」

それ迄、けんけんがくがくと論じていた若い人々は、一齊に黙つてしまつた。その後には、何となく、間のぬけた、ばつの悪い空氣が一座をおおつてしまつた。自信教人信——、そうなのであ

る。全くその通りなのである。だが、それは言われるまでもないことなのである。それを言われては、もう何も言えぬ、それは最初にして最後の切札なのだ。人々は、皆んな心の中ではそう思っているのだが、ただそれを言わないのだ。いや言えないのだ。それを言えば、自分が未だ本當に信じてないこと、信仰を得てないことを、告白することになつてしまうからだ。

人には誰でも、どんな卑しい、どんな貧しい者にでも、プライド——自負心がある。僧侶にして、信仰のないことを告白することとは、このプライドを捨てることになる。僧としてのいのちを斷つことになる。だから、これ丈けは誰も言わぬ。いや、お互に言わずともその胸の中を、お互いに察し合つて、これを見すごしているのだ。このこと丈けを抜きにしている。その一番大切な事柄を省略しているから、いくら論議を重ねても、現實のきびしい批判に遭うと、砂の塔のように、もろもろ崩れ去つてしまうのである。然し、今となつては、とや角言つてゐる時ではない。今から再び出家しなおして、先づ己れが信ずるには遅すぎる。今にしてなお出来ることは、自分も共に、信じて行こうとすることではない。自らの信仰の道を、歩みつゝ、人をもこれに誘つて行くことしかない。

信ずるといふことは、「難中轉更難」である。だが、これ丈けはギリギリのところ、何としても得なければならぬ。すべて、宗教に關する論議は、この上にのみ立つてゐるのであつて、これを

抜きには成り立たない。

◎

現在は「批判精神」が旺盛であるといわれる。ところが「批判」といふと、自分丈けは高い所にいて、あれこれと文句をいうことと解され勝ちである。私の今まで述べて來た所も、自分丈けは例外として、現代人はどうの、佛教はどうのと云つてゐるようだが全く、うつかりするとそうなる。

いうまでもなく、批判といふことは冷靜公平でなければならずそのためには局外者の位置に立つ事も必要である。然し、夕涼みの縁臺將棋の批判とはちがう。岡目八目も結構だが、こと宗教とか信仰といへば、それは人間たる者の、人間たる本質にかかわることなのであるから、これをひとごとのように云うのは、自分は人間でないといふことにはかならない。自分もまた、惱み多き人の子である以上、いくら批判の立場に立つてゐるとしても、矢張り、自らの眞情から湧き出でた心からしなければ、その批判は人間ばなれのした、空理空論に終つてしまう。

先日、洞爺丸事件についても、色々の人から様々の意見が出された。船長に責任がある。いや出航命令を出した者にある。いや氣象臺の觀測の不備のせいだ。いや船の構造そのものが不完全なのだ、等々。全く賑やかなことである。そしてその局に當つた者は、一様にみな、自分は正しかつた、それに關係がなかつたとい

う。此の人達の話を書いていると、何だか、船がひとりでに動き出して、勝手に嵐の中にとび込んで、ひっくり返えつてしまったように思えて来る。全く不思議な話である。

あやまちを繰り返さないために、徹底的に論議することは結構である。然し、そのために死んだ人は、そして残された遺族はどうなるのだろうか。安藤國務大臣が、久保山さんの遺族に、とりあえず弔慰金を届けに行つて、これで少しでも家族をなくさめることは出来た、が然し、死んだ久保山さんは戻つて来ないのだと述懐されたとのことである。あやまちは繰返えしてはならぬ。が、既に起つたあやまちは、済んだことは仕方がないでいいだろうか。人々は余り、第三者的になりすぎてはいないだろうか。

たゞ、その中で、洞爺丸の船長の未亡人の立場は、まことに微妙であり、同情すべきである。責任者と遭難者と二つを兼ねた船長。理屈の上では、責任者として倦くまでもその責任は追求されるべきだ。が遭難者の一人として、一家の父としての立場には、他の遭難者と何の變りもない。この二つの立場に一人の人間が立つということ、このことに、船長の遺族の悩みがあると共に、現在の社會に生きる人々の共通の悩みがあるのではないだろうか。



一方では、非常に理知的な判斷で、社會の出来事を批判する。然し、批判する者も、矢張り批判される社會の一員として、批判されるような社會を作り上げているのである。これでは、いつま

で立つてもどうどうめぐりである。泥棒が裁判官を兼ねているといつては、いいすぎになるであらうか。

死にとりかこまれ、しかも自分も當然は死すべき運命をにないつつも、平氣で、自分丈けは例外だ。俺だけは死なないぞといった顔をして他人の死を批判している。このどうどうめぐりに人々はどうしても氣がつかないのだろうか。やがては批判されるべき自分に、どうしても心が向かないのだろうか。

「自信教人信」を抜きにしているからである。俺丈けはこれでもいいんだ。俺だけは例外だという、はつきりした意識でなくとも先の講習會の時の話のように、そのことは言わぬことに、お互同志黙契し合つて、みすごしているからなのである。一番肝心なことを抜きにして生きている。これでは世の中が騒然として、不安に満たされるのは當り前である。

群衆の中にあつては、群衆の動きは分らない。といつて、群衆から離れた處に出てしまつては、群衆の氣持ちは分らなくなる。簡単にいうならば、背伸びをすることだ。人よりちよつとでも高く首を伸ばして、四圍を眺めること。釋尊は八十年を人間釋迦として、大衆と共に、大衆の中に生きられた。ひとり山にこもり、林にかくれたのでもない。自ら、與えられたいのちを、與えられたままに生きて行かれた。それでこそ八十才の生涯を本當の人間のいのちとして生きられたのである。いのち尊しとされたのである。

生 と 死

——「一言芳談抄」講話 (四)

藤井實應



去る九月二十六日、青函連絡船、洞爺丸が台風のため函館港内にて坐礁轉覆、千餘名の死者を出したという悲惨事は、全世界の耳目を驚かし、悲痛な衝動を與えました。世界海難史上最大のものといわれた一九一二年四月一四日、英國の豪華船タイタニック號がニューヨークに向う處女航海に氷山と衝突、翌朝沈没、一五一七名が海に吞まれた、それに次ぐものだといわれます。私たちはそれぞれの立場で、原因を究明し、再びかゝる悲惨事の起らぬよう心得て犠牲者の靈を弔いたいと思います。この事件についても、それぞれの立場でいろ／＼と教えられ反省させられるでありましようが、私たちは、いつどこで死に直面するかも知れぬということを今更に強く反省させられます。そしてその死は一度は必ず當面せねばならぬことであります。古人はこの事

に對して特に詳に教を残されています。「無常」の教がそれであります。「會死念佛」の教がそれであります。「生死出離」の問題がそこにあります。生を明らめ死を明らめるは佛教者の一大事のいわれであると説かれています。「一言芳談」にも「無常」「念死」「念佛」が説かれ、「生死を離れる」「生死よりの解脱」ということが、求道者の中心課題であつたことが、各法語にうかがえます。「生死」とはまよいということですが、人は生れてやがて死んでゆきます。しかも生に愛着し、死を恐怖いたします。生の依るところを知らず、死の歸するところを知りません。それを生死の凡夫といつております。その「生死」を離れるとは、即ち眞に生きる道を求めることであります。眞に生きることによつてのみ、眞に死することもできるからであります。即ち生死を解脱するとは、生死のまよいを離れた道です、眞に生きゆく道であり、それはまた眞に死してゆける道でもあります。

ます。「生死を出離する」「生死を超ゆる」「生死を解脱する」などみなこの人生一大事を指した言葉であります。求道者たちは、みなこの人生の一大事たる、生死の出離ということを問題とし、これが解決につとめたのであります。

○高野の明遍僧都、善光寺參詣のかへりあしに、法然上人に對面、僧都問て云く、いかゞして、今度、生死をはなるべく候。上人の云く、念佛申してこそは。問給はく、誠にしかり、但妄念おこるをばいかゞ仕り候べき。上人答て云く、妄念おこれども、本願力にて往生するなり。僧都、さうけ給りぬとて、出給ひぬ。……………。

これは勅修御傳の十六の卷にもせられてありますが、初對面にもかゝわらず、一言も世間的な挨拶はなく、まつ先に「いかゞして、今度生死を離れることができましようか」とおたづねになり、問答數番、「さうけ給りぬ」（領納の言葉で、ハイ分りましたの意）と又、世間的な挨拶もなく退出せられた、何という眞剣な態度でしよう、並居る人々も感服し「尊びあつた」と勅傳に記されております。まことに生死を離れる道は念佛であります。阿彌陀佛の本願にうちまかせた散心の念佛によつて、私如き凡夫も生死を離れることができるのであります。妄念おこるとも、起らば起れとうちすてゝ、生れつきのまゝにて申す念佛によつて救われてゆくのであります。

無常、念死のみ教は佛書の至るところに見られる大教訓ですが、現代人（私自身）はこの大切な事實に適うみ教を省みない傾向があるのではないでしようか、たといその教は無視されようとも、この世の事實は無常であります。忙しい忙しいで仕事に追われ追われて、とらわれの生活をしているのが、今日、多くのすがたであります。忙しければ忙しいほど、ほんの一ときでもよろしい、靜かに無常を觀じ、死を念すべきであります。これあるとき、いつどこで死んでも後悔しないだけの生き方をしてゆかねばならぬと氣すいてくるであります。従つて一々の仕事もしつかりとしてくるであります。「一言芳談」に示された、諸師の談語を拜して自らに省みたいと思ひます。

○敬佛房云。…………後世をおもふ故實には、生涯をかるくし、いきてあらんこと今日ばかり、たゞいまばかりと眞實に思ふべき也。かく思へば、忍びがたきことも、やすくしのばれて後世のつとめもいさましき也。…………出離の詮要、無常を心にかくるにある也。

故實とは故事の實なるものとの意で、昔から行われてきた事實をいうので、最も肝要なことを意味します。

○解脱上人云。一年三百六十日は、みな無常にしたがふべきなり。しかれば日夜十二時は、しかしながら終焉のきざみと思ふべし。

一年三六五日のうち、吉日といわれる日にも人の死なぬ日とはありません。或人は「今日も人の死する日なり」といわれた、その人とはひとごとではない、いつかは私自身のこと「今日は私の死する日なり」が來ます。善導大師往生禮讚の文に「一切臨終時」という文がありますが、良忠上人の「記」には「時々尅々に臨終のおもひをなす」と釋せられました。

○聖光上人云。八萬の法門は、死の一字を説く、然ば則ち、死を忘れざれば、八萬の法門を自然に心へたるものにある也。

釋尊のひろく經を説き給うたのは、生死解脫即ち生もなく死もなき佛となさしめんが爲であります。佛となるの道も死を念ずるところから開かれます。後にその點をもう少し詳しく申述べることにします。

○敬佛房云。世間出世至極、たゞ死の一事也。しなばしねとだに存ずれば、一切に大事はなき也。この身を愛し命をおしむより、一切のさわりはおこることなり。あやまりてしなむは、よろこびなりとだに存ずれば。何事もやすくおぼゆるなり。……

○明遍云、出家遁世の本意は、道のほとり、野べの間にて死せむことを、期したりしぞかしと。此の如くおもひつれば、いかに心ほそき事にあふとも、一念も人をうら

むべからず、それにつけても佛力をあふぐべきなり。これら諸師のみ教は、靜かに味えば味うほど、實に魂にそみ、胸にひびきわたり、心にとゞめらるゝものばかりであります。

しかるにともすると、この大切なことを忘れがちであります。目の前の事件にとらわれて、損した、得した、惡口をいわれた、ほめられた、盛になつた。衰えた、勝つた、負けた、あゝだ、こゝだと目の色をかえて走りまわつていくのですが、財産を山と積んでも一朝にして失ふことがあり、立派な邸宅をかまえても火事にあうことがあり、榮譽を得ても惡罵とかかわることがあり、戀愛を得たとよろこぶまもなく、失戀を悩まねばならんことがあります。無常であるからであります。失望したり、絶望したりして、或は反省を深めてそれを動機として、信する人もあります。それらの事物はまた再び得られる場合があるかも知れませんが、しかし自身が死に直面する場合が必ず一度はあるのであります。死は待つたなしです、とりかえしはできません。そしていつどこであうかも知れぬのであります。この死を忘れぬことは眞の生を明にするもとであります。

私たちは愛する子供に先立たれたり、たよりにしていた親に死に分れたり、或は親しき友の突然の死に會うたりしたとき、死というものを自己一身の上にあてはめて氣づかせられるのであります。死！如何なる富や財も無價値に

してしまします。如何なる知識や技能も及ばぬものです。一切の榮譽も權勢も無にしてしまします。全世界が一舉に失われるような悲慘な氣もち、人間の力のはかなさ、一切のものゝ無常などを痛感せしめるものが死であります。しかしこの死をまだ客體的にながめているようでは、まだなほ自身の死ではありません。死は身代りの出来ぬ己れ一人の事件であります。この自身の死に對し、死を覺悟して生きゆかねばならぬのであります。かゝる覺悟ができれば、今迄考えた富、財産、榮譽、權勢、戀愛等の見方が變つてくるのであります。死の前にはそれらは無價值となるからであります。まことに死はすべてのものの見方、價值を轉換せしめるものであります。

お互に死なねばならぬ身であると思えば、すべての人がなつかしくなります。死なねばならぬから、この生が一層いとほしく、その價值も見出されてくるのであります。「やがて死すべき身のいのちあるは有難し」(法句經)と氣づかせられてきます。そしてまもなく死なねばならぬものとして、今日眞に生きてゆこうと心がけることになります。人に迷惑を及ぼしてまで金儲けなどしなくてもよい。榮譽權勢も夢の如く幻の如きものと感ぜられてそれにとらわれなくなる。まことに死を念ずる時に、人生のあらゆる本當のすがたが分つて參ります。そして生の愛着からも離れ、死の恐怖からも救われて、所謂生死を離れ、生死を超ゆる道

もやがて開かれてくるのであります。

「それにつけても佛力をあふぐべきなり」でありまして阿彌陀佛の本願力を仰ぎ、阿彌陀佛に歸依すべきであります。阿彌陀佛に歸依する、即ち阿彌陀佛に歸依(南無)するからには、私の生の依るところ阿彌陀佛であり、死の歸するところも阿彌陀佛であります。生きると死するも阿彌陀佛の中であります。

裸坊天は笠なり、地は足駄

どこにこけても彌陀のふところ

(徳本上人)

いづどこで死んでもみ佛の中というような大安心も南無阿彌陀佛からできて參ります。いつ死んでもよいという生き方こそ眞に生きるといえます。眞に生きてこそ又眞に死することもできる。いつ死んでもよい生き方は、またいつまで生きてもよい生き方であります。かくて生死を超ゆる道は只一向に念佛するにあります。

生けらば念佛の功つもり、死なば淨土へまいりなん、とてもかくても此の身には思ひわづらふ事ぞなしと思ひぬれば生死共にわづらひなし(法然上人)

(つゞく)

幸福への第一歩

藤井正亮

先日新聞に、刑務所へ横綱千代の山一行が訪門し土俵入と慰問角力が行はれた記事が寫眞入で掲載されていた。

或人が茶呑み話に

「全く時代も變つたもんだね。我々は税金だデフレだ借金だと毎日頭を病んでいたので角力どころか横綱の顔も見に行けないでいるのに、刑務所の收容者はやれレクリエーションだとか何だとかで税金の心配もいらぬし呑氣に暮せるんだから幸福なもんだな。こんなことだから悪いことをするのが平氣になるんだよ。」

と言つていた。

私は否定も肯定も出来ない氣持のまゝ、「そうですね……」と合づちはしたものの相當の有識者でさへ此のような言葉が出るんだから、世間の人殆んどが此のような皮肉的見方をしておるのかと思ふと、つい此の間教悔の當番で話をして來たばかりの私としては何かすまないような氣も湧いて來た。

と言うのは其の時の話に、

「胃腸でも神経痛でも痛くもかゆくもない時が一番健康で、一番幸福で、一番感謝しなければ

藤井先生の

教悔に寄せて

四工千葉 勇

六月二〇日大成寺の住職藤井先生のお話を聞いた、其の折私の心の琴線にふれた一言があるので其の事について考えると共に、私の所感を綴つて見たいと思う。

社會の落伍者——此の言葉は他人事ならぬ私の事だ。現在の生活に入つて半年になるのに私は今後の生き方に何らの設計も、目標も持てずに、たゞ時間の過ぎるまゝに其の日暮しをして來た、たま／＼先生のお話に接したのであるが。

「何の思想も持たずに、何の宗教も持たずに暮らす一生も一生なら、私は何の爲に生まれて來て何の爲に生きているのかを考え、其の目標に向つて一日／＼向上を目指

ばならないのに其の時は胃腸の存在も神経の存在も知らずに無關心でいるが、悪くなつて初めて苦痛を覚え悪いと腹が立つ、そして今迄ことなく暮した幸せを今更のように有難く思ひ出すものである。同様に人生に於ても世間の殆どの人が、第一段階として幸福な時ほど幸福を知らず、幸福なものほど幸福を當り前だと思つて感謝もしないで暮しておるものである。

だから第二段階として不幸な時になつて初めて幸福な時を有難いと知るようになる。そして多くは其の不幸をかこち歎くものである。そして他人がみな幸福に見え自分ばかり損をしておるやうに情なく思うものである。然し之ではいけない。ネールの第三勢力ではないが、眞實の人生は第三段階として、幸福も不幸も人生は皆、幸福なんだ、みな有難いのだ、幸不幸を論ずることなく、人生は成功しても失敗してもどこまでも、眞實を通して活きる信念と力を得たものが幸福なんだと。此のように悟ることの出来た人が人生の勝利者である。諸君は此のような得がたい幸、不幸の経験をもち合わせておることでありましょう。今こそ一番よい人生修養の機会を得ておるのだから其の幸福を喜び、念佛すべきである。」と話を結んだことを思い出した。

そして或二度目の経験をもち收容者の一人は眞剣な面持で、「自分はまへの時はそうでもなかつたが、今度は一日でも早く家へ歸りたい氣持で一杯です。今度出たら絶對酒は飲まないで石にかじりついても一生懸命働いて親や妻子を安心させてやりますから、どうか歸るまで家族のものをよろしく頼みます。」と述懐されておつた。

人生に於ける眞の幸福は何であらうか。多くの人が見られない横綱角力を見ることが出来たり、税金も納めないで吞氣に食わして貰つておることが幸福と云えるだらうか。どんな苦勞があつても、親や妻子が慰め合い勵まし合つて正しく働いて行ける時こそ眞の幸福を味うことが

して生きて行く事も一生だ、」
という言葉聴いた時私は體に血がのぼるのを感じた。

確に私は思想も宗教も身につけてはいず其の時の感情の動きを其の儘動作に現わして來た、其の結果がどうであつたか今更申上げるまでもない。

私の家は禪宗で私も子供の頃良く寺に連れられて行つたのを記憶して居る、これも小學校の三四年後には記憶がないから私が成長盛りには佛さんがありがたいものだとは思つていなかつた様だ。終戦後は全く神佛などと言う言葉すら忘れていたのだが、本所へ來て度々の教誨で、何か私にもすくいの手がさしのべられている様な氣がして其の存在を知らうとして懸命に努力していたのだが、藤井先生の一言で宗教というものの一片をのぞいた様な氣がした。

實際私は何の爲に生れて來たのであらうか、何が不足して刑務所へ來る様な事をし

出来、之が生活の基盤となつてこそ眞の幸福を獲得することが出来るのではないかと思う。

法然上人の言葉に、「本願の念佛にひとりだちをさせてすけをさゝぬなり。(中略)善人は善人ながら念佛し、悪人は悪人ながら念佛しただ生まれつきのまゝにて念佛する人を、念佛にすけさゝぬとは云ふなり」と自己が自分を發見することの出来たことは、生まれつきのまゝの裸の自己が佛の救いによつて生かされておる事實に目覺めた時である。これは大きな歡びであると同時に得がたい力であり幸福への第一歩である。世間では自他ともに善人なりとゆるした人の中に案外の悪人がおり、世間から冷眼視される悪人の中に眞の善人が發見されることは面白い現象である。又幸福だと云われる人が案外不幸であつたり、不幸だと見られる人が案外歡んで幸福圓滿に暮しておる事實のあることは誠に有難い人生ではないだろうか、しみじみ感づき此の筆をおく。

——大成寺住職——

「まりも新聞」御送り致します。これは當市宮本町釧路刑務所教育課發行で收容者の更生の一助にと出来た機關紙です。四面の「藤井先生の教悔に寄せて」が誠に切實な信仰を求める氣持が表現されておるので、浄土誌上に掲載させて頂けば幸甚であり、本人も亦、これを縁として更生すると思ひます。

尙同紙所載の小生の「幸福への第一歩」も同時に活用願へれば教悔の時の模様も分るからよいと思ひます。

釧路市米町

大成寺 藤井 正 亮

なければならなかつたのだろうか、——

私はこう考えながら其の原因と思われる事を書き出して見たら其のいづれもが自己辯護になる嫌いを感じて大きくバツテンを書いた。裸にて、生れて來たに何不足、これなんだ、これだよと思つた私は理くつや講釋をぬきにして其の日の生き方にベストをつくそう、これから社會に生れて行くんだから「オギャアー」という第一聲を力強く叫んで二度と再び同じ轍を踏まぬ様努力しようと思う。

幸福を願う氣持は誰しも同じ事だ、私の幸せ(精神的な)は他の人も必らず幸せと認めて呉れるだらう。この人も幸せだ強いて言えば世界全體が——宗教の持つ偉大な力を私の軌道として歩み方を研究しつゝ新しい時代に生きたいと思う。

(釧路刑務所服役中)

人の上の茂賀



泉 湛 田 鶴

尋永二年七月廿六日の早曉、残る星明の中に、突如、六波羅、池殿、小松殿、八條、西八條等、京の二十餘ヶ所から黒煙が立ち上つた。日頃、林泉の美、建築の粹を誇つた六波羅西八條の聚落も火の海に没し、京中に立ち昇る黒煙は、天を覆ひ朝の陽光を暗くしてゐた。

木曾勢洛中に亂入するとの聲に怯えて、平家が、一門一人残らず都を落ちて行くにあたつて、清盛以來二十年築き上げた榮華を焼き拂はんとして、自らの手によつて火をかけたのだつた。

狂ふやうな火に追はれ、京の庶民は、非泣しつつ逃げまどつたのは云ふまでもない。

平家一門は妻子眷屬を伴つて、今日を最後と、無念と愛惜の涙のうちに、住みなれた都を捨てて行つた。

かうして、あわただしく一刻を争つて都を落ち行く際にも、現世のことを頼み、後生の事を問はんがために、法然上人の庵を訪れた平家の公達も少くはなかつた。

日頃、上人の庵室を訪ねて聞法してゐた越前三位通盛は、

「今や一門運つきで都を落ち行く事になりました。合戦のときは一陣を承る事となりませう。いづれは武門の末路、かばねを野にさらすは必定なれば、都の邊にて通盛うたれたりときこしめされたなれば、御弟子をつかはして死骸アタリを取り片づけられ、後生を弔ひたまわりたい」

と、上人に今生のいとまをかね、後事を依頼して行つた

平氏が一の谷に據ると、源氏は、範頼を大將として、畠山重忠、梶原景時等數萬の大軍を率いて攻め、搦手には義經大將となつて、大肥次郎、熊谷直實父子等二萬

餘騎を以つて攻めた。

平家は、新三位中將資盛、越前守通盛、備中守師盛等、七千餘騎で守つてゐた。

二月七日のこと、金城湯地とたのんでゐた生田、一の谷兩城も、思ひもよらぬ鶴越の絶嶮からの義經の奇襲に逢ひ、源平の兵士混亂白旗赤旗入りみだれて色を交へ、双方力闘血戦、わあつわあつ云ふ諸聲は、山に響き谷に飜し、地を動かして激烈な接戦となつた。

終に平氏は、一の谷を朱に染め屍を積んで、もろくも總崩れとなつて西海へ敗走してしまつた。

山の手を守つてゐた通盛の軍も、さんざんに破れ、既に深手を負ふた彼は、最早やこれまでなりと、靜なる處にて自害せんものと、湊川邊まで落ちのびた時、駒の音が聞えて來たと思ふ間に、七八騎の敵にとりかこまれてしまつた。

今まで通盛につき従つて守つてゐた武士も最や切られてしまつてゐた。

いかに戦さ上手な通盛も只一人の上、深手を負ふてゐることとて、平家の公達の首級を擧げて功名にせんものと競ひ合せて來る敵の相手ではなかつた。はかなくも近江國の佳人、佐々木三郎盛綱の子息俊綱のため討ち取られてしまつた。

一の谷の城も破れて平家は西海へ敗走し、一門多く亡ぶとの噂が洛中へ傳はると、人々は今更ながら世の推移に哀れと驚きを感じ合ふた。

平家の討死千餘と噂され、十日には早や、忠度、通盛、知章、師

盛、經正等の首級を齊らし、重衡を生捕にして、義經は京へ凱旋して來た。首級は都大路を北に渡され、あはれ左の獄門の樗の木に梟されてしまつた。

通盛討たれたりと聞くと、直ちに隨運成阿の二人が弟子は上人の命によつて生田の森へ急いだ。

二人は、戦い倒れた源平の將士の靈を篤く弔ひつつあちこちと、酸鼻な戦の跡を捜し求めたが、通盛の遺骸は容易に見出せなかつた。湊川へ行つてみると、わきの下に切紙に越前ノ三位通盛と認めた遺骸をやつと發見出來たので、彼の妻の小宰相に引き渡して生前の頼みを果したと云ふ。

又、

重盛の御曾子備中守師盛等主従七人、源氏の追撃の急をのがれて小舟に乗り移り、トモヅナを切つて沖に漕ぎゆかうとした。

沖には、早くも源氏の追撃の危地を脱しやうと、平家の一門を乗せて多くの舟が漂うてゐた。

その時、鞭鏝を合せて馳せ來る大兵の武士は、

「いかに、備中守殿の御舟と見參仕る。乗せ候へ」

と、大聲に舟へ呼びかけた。

見れば、新中納言知盛の侍、清衡門公長である。

舟に乗らんと請う味方を、一人残して置くのも不惑と思つてか、

師盛は、

「乗せてつかはせ」

と、命じた。

主命である。嫌とも云はず、舟を磯邊へ再び漕ぎ寄せて來た。

すざましい勢で追撃して來る敵の蹄の音に、よほど公長はあわてたと見える。駒をなぎさの岸壁に進めると、馬上から、がばと小舟へ飛び移つた。

とりわけ大の男が飛び乗つたこととて、小舟は、がくと大いに揺れ一方に傾いたと思ふと、あれよと云ふ間に轉覆してしまつた。

そのはづみに、師盛主従は、海中へはり出されてしまつた。舟の下敷になつた者もゐた。

水は冷たし、鎧は重し、泳ぎを知らない師盛は、波間に浮きつ沈みつ身をもがいてゐた。この時、十四五騎で公長を追つて來た義經の麾下の遠江守義定は、この容子を眺めて急ぎ馬より下りると、小舟に乗り移つて、師盛を熊手にかけて引き上げると、難なく首をかいてしまつた。

二

近頃、京の巷ではこんな噂をするものがあつた。

「吉水の庵室で赤兒の鳴き聲を聞いたぞ」

「ほんとうか、それは」

「いや、初めは空耳だと思つたが、間違ひなく赤兒の鳴き聲だ」

「一體、誰れの子だらう」

「大きな聲では云はれないが、それが上人のかくし見だとの事だ」

「まさか、あの戒徳高い上人とは」

「アハハ、わかるものか」

「いや、放埒な弟子の生ました見かも知れぬぞ」

「庵室をよちよちはい廻つてゐたが、上人の衣の袖にすがると、上人は抱き上げられてニッコと微笑されるのを見た」と云ふものがあるとの事」

「これが、念佛門攻撃の種とならねばいいがな」

と、打ち案ずるものもゐた。

平家が都を落ちて行く時、師盛は懷娠してゐる妻の行く末を案じて、將來の事を上人に頼んで行つたのだつた。

平家没落後、源氏の手によつて行はれた平家の殘黨狩は峻烈を極めた。

平家の一類が所々に隠れ居るのを搜出し、或は生捕り或は兵をさし向けて押寄せ討取つたのだつた。

で、師盛の妻は乳呑兒を抱いて、あるこちと轉々と逃げ歩いた。

平家の落人と、後日のたたりを恐れて誰もかばつてくれない。平家と名をつけば、一夜の宿をかす人もなく、影を隠すべき住家もなかつた。師盛の若き妻は、乳呑兒をかかへてどう生きて行くべきすべを知らず、思ひ餘つて幼兒の哺育を上人に頼んだのだと云ふ者もゐた。

これには勿論なみなならぬ決心を必要とし、苦勞を覺悟せねばならぬ事であつた。

果して、世間の注視をひき、疑惑と虚説とが湧き起つたのだつた。上人は、あらぬ濡衣を着せられながらも、幼兒は匿まれすすくと育てられて行つた。

念佛の聲は、嬰兒にとつては搖籃であつた。

或は、其の後他に置まれ育てられたかも知れないが、とまれ建久六年、十三歳の時髪を下して上人の弟子となり、勢視房源智と名乗つた。

一時、慈鎮和尚の室に預けられ、顯密の學問を修め、密かに切磋琢磨して諸宗の言旨を究めた。

やがて再び上人の許に歸つて、上人のやさしい勞りの中に膝下に侍することとなつた。

一門凋落して今や何處にもたよるところのないいたいけな貴公子源智は、上人を命の親とも柱とも頼んでいたらしく侍づいた。

上人の母にもまさる愛撫に育てられ、師弟としても、只ならぬなつかしみがあつた。

平家の榮華一朝にして西海の波間に沈んだ後に於て、平家一門の源氏の世に生きて行く事は、仲々容易な事ではなかつた。

何と云つても、源智は重盛の孫に當る人である。だから、源氏の世に於ては我が身邊に、常に細心の注意を要する事であつた。

物騒な時代に處する保身の術は隱遁にかざるが、だからと云つてたとひ隱遁したとしても、一身の安全を計る事さへ容易に時代ではなかつた。

思へば、從兄弟に當る維盛の一子六代の非業な最後を思ひやると、一層自身の身邊に絶へず注意をかける必要があつた。

北條時政が都の守護につくと、平氏の殘黨狩は徹底したものとなつて來た。

(平家の子孫と名づく者は、男子は一人漏さず尋ね出すべし。からめ捕つて差し出したる者には、上下を選ばず恩賞は望みにまかすべし)

と、布告した。

欲には上下の差別はない。この恩賞にあづからんものと、否あはよくば出世の糸口を得んものと、平家の子孫を尋ね求め歩いたのだつた。

世は亂れて無節操となり、自己の利益のみを追求してゐた時代のことである。

下腐の子でも色白くみめよき者は、かつさらつて來て、美々しく装ひ何々中將殿の若君とか、何々少將殿の公達と偽り訴へて莫大の恩賞に預つて己の欲を満すものもゐた。

その處刑の方法も、

(幼きを水に入れ、土に埋め、少しおとなしきをば押し殺し刺し殺し)

と、古典に記してゐる如く平家の根を絶やさんものと、慘忍を極めたものだつた、全く身の毛もよだつ地獄圖と云ふ外はない。

小松の三位中將維盛の北の方は、遺兒の六代と幼き姫君と共に、大覺寺の北、萬壽谷に身を潜め、今日の無事を思ひ明日は又どう生きて行くやらと戦々惴々としてゐた。

「維盛の一子六代は十二になり居るはづ、隈なく搜し出して命を絶て」

と、八方に捜査の手が延ばされてゐた。

或日、白い小犬が庭に走り出たのを見た六代は、捕へようと喜々として追ひ廻してゐる容子を眺めた乳母は、蒼白になつて驚いた。

「あなあさまし、人に見られたらどうなされます」

と、あわてて手をとつて家の中へ引きずるやうに引き入れてしまつた。

落人の身にとつては人の目は恐い。外には源氏の目がたへず光つてゐる。人目につく事をおそれて、遊び盛りの子供を一步も外へ出す事すら出来なかつた。

母にとつては多難な道であり、恐怖の底に挫かれた陽のささない生活であつた。

この間も、屋島前内府息二人が捕へられた上梟首されたと云ひ、又越前三位通盛の息も搜出されたと噂された。

こんな噂を耳にするにつけ、

「何事もなかれかし」

と、只それのみを母は夢寐にも祈つてゐた。

が終に、葛蒲谷のかくれ家をつきとめて訴えたものがあつたのか北條の武士に取り圍まれ、六代は捕へられ時政の館へ引つ立てられてしまつた。

惨忍な處刑の程を知つてゐた母と乳母は、胸もつぶれ氣も狂はんばかりに泣き悲しんでゐた。

一時は、手の施しようもない絶望感にとらはれたが、助命を高雄の文覺の袖にすがつたのだつた。

頼朝から深く歸依され心契のあつた文覺が献身的な助命運動によ

つて、やつと六代の一命は助けられ、稚兒として文覺の許に預り育てられる事となつた。

母の喜びは云ふまでもなかつた。

佛門に入れば身も安全と思はれたので、文治五年、十六歳の時、出家を遂げて文覺の弟子となつた。

其の後、建久十年正月十三日、頼朝は五十三の若さで歿し、文覺も謀叛ありとかで搦め捕へられ、隠岐の國へ流されてしまつた。

高雄の奥に、ただ隠遁をのみ志ざし、かくれたる修行に終始してゐた六代は三位の禪師と呼ばれてゐた。あれから早や十餘年が経つて彼も三十となつてゐた。

源氏の追求も、よもや佛門とまで延びては來まいと思つてゐたのに、

「六代は維盛の遺兒である上、且つは鎌倉に謀叛をいだく文覺の弟子である。たとひ頭は剃つてはゐても、よもや心まで剃つてはゐない」

と、幕府に猜疑の目で見られ、安判官資兼に召し捕られて關東へ下されてしまつた。

あはれ、鎌倉の越河のほとりにて斬られてしまつた。

こんな事があつた事とて、源智も、

「ゆめ人に素情を知られてはなるまい」

と、人の世の狭さを感じながらも、常に恐れてゐた。

平家の一類とあればいつ搦め捕られるかもわからないし、六代のやうな悲しい運命をくり返すかも計り知れなかつた。

上人の大きな庇護の下にあるとは云へ、多數の群衆には、いつも六波羅の目の光ることであつた。

自分の信者が増加し勢力を持つ事は、こんな時代では、特に身邊に危険をます事を意味した。

で、法談を初めてゐるやうな時でも、聴衆が五六人よりも増して來たりすると、

「あなたのごとし」

と云つて、法談をすぐ中止してしまふ程、いぢらしくも自己の起居動作に注意を怠らなかつた。

三

建歷二年正月廿二日のこと、いづくからともなく訪れた華麗な女車が、ひそかに吉水の庵の前に止つてゐた。

氣高く貴げなる上臈が女車から降りると、上人に謁を乞ふて室に入つた。

上人の御病氣も、やや小康を保つて弟子達も眉を開いてゐた。

今まで病室につめてゐた僧等も、或者は所用のため他出し、次へ下つて休息してゐるものもゐて、源智一人が看病してゐた。

「暫し御弟子をしりぞけられたし」

との願ひであつたので、源智は、やむなく立ち退いて次の部屋に侍してゐた。

が、上臈の姿を伺ひ見てからは、源智は、いつになく何か落ちつかない心であつた。なぜか異様な胸さわぎさへ覺えるのだつた。

「御氣色はいかがでございます。どう在すやと胸をいためて居りました。この藥を召し給はれよ」

と、心配げな面もちで藥をさし上げた。

が、彌陀の大悲の中に生き切つてゐる上人には、病苦も心のもだへも伺はれなかつた。

上人の顔は、日頃より一層優しく美しく輝いてゐるかに思はれた。格別な親しみがあつたものか、二人は何か密談されてゐたが、やがて裳を曳く絹ずれの音がして貴女は去ち歸つて行つた。

源智にとつては、その貴夫人はどうもただ人とは思へなかつた。何と思つたのか、源智は引かれるやうに庵を出た。

車の行方は、一體何處だらうと追ひつき見人と思つたのだつた。

「若しや、母ではあるまいか」

何となくそう思はれてならなかつた。

車は、河原の方へ靜かに進んで行つた。

寒々とした霧の中を車の輪音を慕つて、源智は、河原の堤へかけ止つて尙も見守つてゐた。

心の勢か、車の物見の小簾が上つたやうにも思はれた。

北の方へ行つたが何處へ行つたのか、霧がかかるやうに、車の姿は忽ち見えなくなつてしまつた。

あの貴夫人こそ自分の母ではなかつたか、臉に浮ぶ母を想ふて車を慕つて空しくすごすごと庵に歸つて來た源智は、母の消息を知りたかつたのであらう。めんめんたる母への慕情をいだいて、上人の膝下に、見榮もなく黒染の袖で面をあほつて泣き崩れてゐた。

ややあつて、面を上げた源智は、

「客人の貴夫人は誰人に存しますか？」

或は母と名乗らぬ母ではあるまいかと、不審と思つて訊いた。

「あれこそ、韋提華夫人よ」

上人は、それと承知してそれと明さなかつたのか、或は韋提華夫人のやうに貴い方であつたのか、謎のやうな言葉であつた。

「いづれに存しますか？」

と、重ねて訊いた。

「賀茂のあたり」

とのみ答へられた。

(賀茂のあたり)

源智は、そのあたりを心の中で想像して、尙も物思ひに耽つてゐた。

その翌日、廿三日、源智の請ひによつて、念佛の要旨を病篤き中に一紙に自筆で認められて與へられたのが、有名な一枚起清文である。

常時上人に近侍して殊に愛されてゐた源智は、浄土の法門と圓頓戒の兩脈を受けた上、上人の所持にかかる本尊房舎聖教のとりどころなく譲り受けたのだつた。

上人の遺誓を人にも見せず、一期の間、頸にかけて秘藏してゐたが、年來の師檀の契深かつた川合の法眼が怨望したので授けられた。

それから浄土宗の骨目、未代念佛の龜鑑として世に流布される事

となつた。

幼少の頃から愛育の思のある上人が遷化された後は、賀茂のほとりささき野に庵を作つて移り住み、つねに賀茂社に參詣してゐた。母ならぬ韋提華夫人を慕つてか、其の後は賀茂の地をはなれず、世人からは賀茂の上人と愛稱され崇ばれてゐた。

父母の縁の至つてうすい源智であつたが、まだ見ぬ母の姿をあざやかに深く胸に刻んで、念佛三昧に耽りつつ、久遠の母として、廣大な彌陀の大悲の中に生き切つてゐた事であらう。

特價奉仕

一、寺院用佛具類一式

一、在家用佛壇、佛具一式

多少に拘らず御用命或は御紹介下さい

東京都江東區深川三好町一ノ五長專院脇

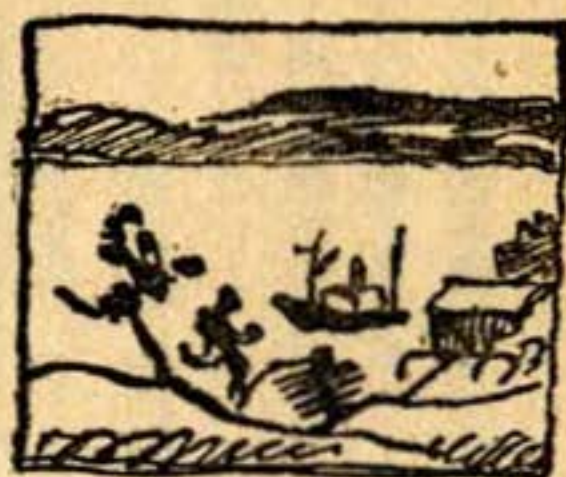
區役所前

正本堂佛具店

電話深川(64)五八五八

どじようとたにし

— 童 話 —



蓬 田 八 重 子

三太は、井戸の近くの、へちま棚の下で、たにしをつぶしていました。大きな平たい石の上にたにしを五六粒づつのせでは、手ごろの石でピシャリ／＼とたたいてつぶしました。三太は、このたにしをつぶすのは、あまり氣持のいゝものぢやないと、いつも思うのですが、これはどじようをとる餌をこさえるのには、どうしてもしなければならぬので仕方がありません。それにこの餌には、もう一

つ、あの臭いにらをきざんでまぜなければならぬ事が、また嫌いでした。その二つにこねかをまぜて、團子に丸めて、竹であんだ筒のようなどじようというものにいれて、どじようをとるのです。夕方までに、準備をすませて、それを田んぼや用水堀などのどじようのいそうな場所に、しかけておいて、朝早く、夜明頃には、それを引上げてくるのです。

涼しい風が、へちま棚のへちまを、ブラリブラリとゆすつても、近くの松の樹に、みんな蟬が啼いても、三太は、それに氣をとられようとせす、たにしをつぶしていました。

餌を作るのは好かないけど、どじようをとつてたまつたら、町へ賣つて、それで本を買つたり、ボールを買つたり、それに修學旅行費の積立をしたり、といつばい楽しい計畫をたてています。それで毎日こうして、夏休み中の仕事にきめて、實行しているのです。もう、台所の流しの下においた手桶には、どじようが二升あまりも、いれてあります。泡をいつばい水の上に出して、ゴシヤゴシヤと渦まきのような玉をつくつて手桶の底に、どじようは固まつていますが、時折のぞいてみると、どじよ

うは、びつくりして手桶からニヨロ／＼とび出したりするのもあります。手桶の中には、少しばかりの大豆が、水にすつかりふやけて、どじょうの餌にはいつていました。

「そうだ、明日は、次郎ちゃんと一緒に、町へ賣りに行こう。あんまり長くためとくと、やせて目方がへつちまうからな。」

三太は、たにしをつぶしながら、そうつぶやいた時、元氣な明るい聲がきこえました。

「三太ア。おーい。三太よオ。」

「オー。次郎ちゃんかア。こつちだよオ。いま餌こさえてるよオ。」

聲の主は従兄の次郎でした。どじょうどうを十あまりもたばねて、細竹に結んだのを、肩にして、三太のそばに來ました。

「まだ餌が出來てないね。よし。手傳つてやろう。その石、僕にかしなよ。」

「うん。次郎ちゃん。頼むね。」

よおしと、次郎は、肩の荷を、傍におろして、手傳いました。次郎は、小學生の三太とちがつて、もう今年から中學生になつただけあつて、三太よりずつと上手にたにしを

つぶしました。にらをくさいとも云わず、細かくきざんで、サッサと餌をつくりまします。六年生の三太と一つしか違はないのに、ずつと兄さんでした。

「おう。次郎か。お前たちは、よく毎日、精が出るのう。感心感心。」

ソロリソロリと、杖をたよりに、えびのようにまげた腰で歩いて來たおじいさんは、二人に聲をかけました。眼がすつかりかすんで、杖がなければあるけない、白髪で、白いひげのおじいさんでした。

「おじいさん。今日は。」

次郎は、こぬかをまぜあわせる手をやすめて、おじいさんにペコリと頭を下げました。

「どじょうの餌作りは、厄介なものぢや。三太は次郎に、こさえてもらつてるのか。ハハハ。」

「だつて——。おじいさん。」

何だつて、どじょうは、たにしをつぶしたのや、くさいにらなんて、變なもんが好きなのかなア。」

三太は、甘えるように云いました。

「ハハハ。そりやわけがあるのさ。ずつと昔からな。そうきまつとるのぢや。で、おじいさんも、次郎や三太

ぐらいの子供の時分も、そうやつて、どじようをとつたもんだ。」

「どういふわけですか。おじいさん。」

「おじいさん。おしえて——。ネ。」

次郎も三太も、おじいさんの白いあごひげを見上げて、瞳を輝かして云いました。

「ヨシヨシ。ぢや話してやろうかな。どれどれ、腰をかけてと。で、お前たちは、わしの話をききながら、餌を仕度したらいい。」

おじいさんは、二人の孫にお話をして下さいました。いつもおじいさんは、むかしばなしを孫達にして下さいます。慾ばり和尚と小僧さん、瓜子姫、化け狐を退治した話などこれまでに、子供達は面白いむかし噺しを何度もおじいさんにきかしてもらいました。同じお話を、何べん聞いても、この白いひげのおじいさんからきくと、きく度に新しいお話のように、子供達をひきつけるのでした。おじいさんは子供の時、またそのおじいさんおばあさんから聞いた話にちがひありません。その語り古された古い古いむかし噺を、おじいさんが、孫達に喜んできいてもらうことは、年

をとつたおじいさんにとつてもまた、大きなたのしみでもあつたようです。

次郎も三太も、すつかりおじいさんのお話に聞きいつて、三太は、どじようの餌づくりがいつもより樂々と出来るのでした。それは、次郎の親切な手傳にもよりますけれど——。

おじいさんのお話を、私が代つて書き記しましょう。齒がかけたおじいさんの、訛なまりのひどい發音では、皆さんによくききとれないでしょうから——。

× × ×

昔昔のことでした。

沼にすむたにしが、何かこの頃元氣がなく。もの思ひにしずんでいる様子でした。それを、やはり沼の泥の上をヌラリヌラリと泳ぐどじようが見て、心配していゝました。

「これこれ、たにしや。どうしたというのだ。この頃お前は、元氣がないぞ。病氣かね。」

「どじようどの。すみません。病氣ではないが、この頃少し、心にかゝることがあつて、悩んでいるのです。」

「何の心配ごとかね。この私に出来る事なら、友達のために力になつて上げよう。」

どじようは、ひげをピンとはねて、たにしに云いました。たにしはきまり悪そうに、

「では云いますが、笑わないで下さいね。じつは、この沼の近くの長者の一人娘がいますね。あの娘が、この沼の蓮の花をとり來たのを見てから、私は、あの娘をお嫁さんにしたくなつたのです。」

小さな聲でたにしはどじように云いました。笑うなといくら云われても、あまりの事に、どじようは、呆れて、泡をブク／＼口から出して笑いました。

「たにしや。それは、出来ない相談。身のほど知らずにも程がある。ハハハ。」

「だから、私は、黙っているつもりでしたが、あなたがあまり親切に云うので、云つてしまいました。せめて、あの娘の傍に近寄つて、ふみつぶされても本望だから、あの娘のそばに行くことだけでも出来ないでしようか。」

たにしが、あまり熱心で、ふみ殺されてもというので、どじようは、すつかりたにしが可哀想になりました。そして、ひげを動かして友達のために考えぬきました。

その日の夕方です。沼の水を小川にして、邸の庭にひいてある長者の家に、どじようは、たにしをつれて、その小川の流れを泳いでいきました。

娘は、暮れかゝるあたりの景色をながめに、庭の小川のそばに出ていました。どじようは、

「モシモシ」

と呼びました。娘は、何か自分を呼んでいるような気がしたので、あたりを見まわしたが何も見えません。どじようは、また、

「モシモシ、モシモシ。」

と娘を呼びました。娘は、小川の方に聲がするので、その小川の上にかけた石橋の上に歩いていくと、何か下駄でグチャッとふみつけたのです。そこには、あのたにしが、娘を一眼みたさに石橋の上にのぼつて、ふみつぶされた姿でした。小川のどじようは、アッと、友達の死をおどろき悲しみました。娘は、下駄でたにしをふんだのを、とても可哀想に思ひ、きれいな指でたにしをつまんで、そつと小川にすてながら云ひました。

「たにしや、堪忍しておくれ。知らずに、ふみつぶしてしまつたんだよ。私が、氣をつければ、お前の命をす

てさせなかつたものを。」

すると、そこに、一人の立派な、若者が、笑顔で、石橋の上にたつて娘を見て、あいさつをしました。娘は驚いて顔を赤らめました。

「娘さん。有難う。あなたのお蔭で、悪い鬼婆の魔法がとけて、私は、もとの人間の姿になることが出来ました。あなたのように、小さなたにしを、可哀想にと、おつしやつて下さる方が現れぬ限り、私は、あの沼の泥の中で暮さねばならなかつたのです。」

若者は、娘の手をとつて、お禮を云いました。そして、小川の流れの中で、悲しみから喜びへの急な出来ごとを、ただ呆氣にとられているように若者は云いました。

「どじようよ。友達に示した親切を、私は忘れないよ。あのふみつぶされたたにしを、君の餌にこれからは、たべとくれ。喜んでたにしは、どじようにたべられるのだ。」

そして、その若者は、長者の娘と結婚したといふます。蛙はどうして、餌の中にいれるのかつて、それは、魔法使いの鬼ばばが、蛙を大嫌なんですつて。それで、にらは鬼ばばの呪いをうけないようにつて、臭いと嫌わずに、それを薬のつもりで誰でもたべるのだそうです。

× × ×

おじいさんのお話が終わる前に、すつかり、餌の用意は出来ました。

カナカナカナと、ひぐらしがないたので、二人は、おじいさんに、かわる／＼云いました。

「おじいさん、おはなし、とても面白かつたよ。またきかせてね。」

「じゃ、行つてくるね。たんととつたら、どじうを、うちでも食べようよ。」

「ハハハ。行つといで、元氣でよく働いて、うんと食べるのさ。好ききらいを云わずにな。」

二人は、顔見合せて、ニツコリ笑つて、どじようどうを、肩にしたり、手にさげたりして、仲よく、用水堀にいそぎました。

いつか夕もやが濃く立ちこめて、二人の姿は、もやにつゝまれて見えなくなりました。

蛙がコロ／＼と啼いでいました。

芝園だより

○紺碧の空に白雲が流れる。そのはていづこにあるかは問うまい。

たゞ眼前の雲の去來に、黙つて見入ることとしたい。秋はまことに美しく、清い世界である。頭の中にしみ入るような冷氣。そこで、

灯下親しむべき良書が入用。三代嘶ではないが、多いに本誌を御愛讀下さい。

○俗界にも色々のことが起りました。その大部分は皆、悲しく痛ましいことであるのは、何といつても悔いたりぬことです。學界も澤山あり、關西からも先輩知己名士齊々といった盛況。私共の七夕はどうも秋にあるようです。

○増上寺の入佛は好天に恵まれ、ひとしお盛大。こうして除々威儀整うて行けば、新興のチャチな戦後派を引きはなすこと早晚(竹中)

○てんやわんやの中に學會も終了しました。今年は宗學大會がないのは残念ですが、東西より碩學が相會する盛大さは、何としても頼母しい限りです。こんな時に、舊師に拜肩出来る餘香は、何としても有難い極み。

○大村桂巖先生は、とう／＼去る十月二日遷化せられました。一種獨得の風格、特に自己の信念をつらぬき通す人格者も、今は幽明境を異にすることとなりました。十月十日の葬儀は盛大で、安藤國務相もかけつけ、友情の涙をしぼつて弔辭を捧げられました。

椎尾法主の挨拶も、感泣して多言無く、ただ一人残つた畏友を失つた淋しさを述懐して居られました。

○童話を寄せられた蓬田八重子氏は沼津の佳人にて、近時ローカル新聞でその名を轟かせて居られる

新進作家です。特に本誌が爲に、玉稿を頂きました。厚く御禮申し上げます。

○久々に眞野先生のを掲載させて頂きます。過日NHKよりの放送にて好評を博したものです。已に御聞きの方は、更に御熟讀を。

(安居)

○十月は行事が集中する。がしかしとにかく十一月號は、その流れを押し切つて出てきたという感じがする。

○従つて、宗教人ハイライトは再び次號となりました。しかし、本誌は藤井氏のように、現實の中に生きている宗教というか、高い所で色衣にひるがえつて居るような高踏的でないものの紹介があつた。もつと、こうした面の話は、いくらでもあるはずですが、なか／＼善行は顯われにくく、會員の方々の御投稿を切望致します。

○増上寺入佛式は寫眞訪問の如く盛大を極めたが、附設明德學園では十月二十日三十周年を迎えた。同園は關東大震災後幼児保護の急なることより發足したものであるが、逐次内容を充實、今日に到つた。人皆佛性あり、幼児の入佛亦注目さるべきである。(龍海)

誌代 會費半々年二百圓、一年四百圓(千共)。毎號定價三十圓千四圓、前金切次第清算通知申上げます。確實便利な振替を利用して下さい。

「淨土」十一月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿九年十月廿五日印刷
昭和廿九年十一月一日發行

(定價三十圓)

編輯兼 眞野正順
發行人

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人續仰會

東京都港區芝公園五ノ一〇
電話 東京八二一八七
電・芝(四三)一三二八

内山憲尚 著

幼児の言語教育と 童話教育

A 5 版 300頁 特價280圓

- ◇幼稚園・保育園・小學校・家庭に於ける言語教育と童話の教育について、懇切な指導書です。
- ◇著者は30年來斯道の理論と實際に携つて來られ、幼稚園長及び保育學校長として、更に駒澤大學に於て指導に當つて居られます。
- ◇本書は特に協會出版部に於て發行し、營利を離れた實費價で頒布しています

發行所

東京都品川區西品川 5～1002

發賣所

横濱市磯子區原町 4

豊島區雑司ヶ谷 6～1127

☆ 内容一般 ☆

幼児の言語教育

- 1 幼児の言語について
- 2 幼児の言語とその特質
- 3 幼児の生活と言語
- 4 標準語と方言
- 5 アクセント
- 6 言語のしつけ
- 言葉のしつけ・話し方のしつけ等

幼児の童話教育

- 1 幼稚園、保育所のお話について
- 2 幼児と童話
- 3 童話とは
- 4 童話の教育的價值
- 5 幼児童話の要素
- 6 リズムについて
- 7 幼児童話の作り方
- 8 幼児童話の言葉と音聲
- 9 幼児童話のゼスチャー
- 10 幼児童話の選び方と改作

日本童話協會出版部

日本保育材株式會社

株式會社 新日本社

鎖ブランコ 2人乗	¥ 12,000
鎖ブランコ 3人乗	¥ 14,000
鎖ブランコ 4人乗	¥ 22,000
鎖ブランコ 6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ 4人掛	¥ 13,500
太鼓橋	¥ 10,000
ジャングルジム 中型	¥ 28,000
單式滑臺 中型	¥ 23,000
複式滑臺 中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000

此他各種、一報カタログ送

配達實費（都内横濱 500 圓以内
其他 1000 圓以内）組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、（荷造費當社・送料着拂）
組立説明書送付



篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町 7 1 8
電(75) 1024 (池上驛東 3 分)

幼稚園 保育園 運動遊具

・全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にのモ
・ットで、堅牢安全な遊具を納入好評を頂いております。松谷
・光明・芝・明照等の淨土宗幼稚園採用。